

北方文化博物館訪問記。

取材日、二〇一八年一〇月二九日。

広岡裕著『たても野外博物館探見 明治村から江戸東京たても園まで全国三五館』JTB発行 二〇〇〇年初版という本がある。(すでに廃版。アマゾンで購入。)旅行に行くときは、この本を参考にして、目的地付近に民家の野外博物館がないか調べることにしている。今回、直江津を経由して新潟を旅行した。新潟市内にこの博物館があることを知って、ネットで検索をかけた。ここにも茅葺きの古民家が二軒移築されていることを知った。

北方文化博物館は、阿賀野川のほとりの沢海(そうみ)にある。新潟駅万代口バスのりば十三番線より、沢海経由秋葉区役所・京ヶ瀬営業所行きバスに乗車する。約五〇分して上沢海博物館前にて下車する。このバスの便は本数が少ないので、事前に調べてから乗車することをおすすめします。上沢海博物館前のバス停を下車すると案内の看板があり、それに沿って道を歩くと小さな郵便局がある。更に歩を進めると、浄土真宗大谷派の「光圓寺」(こうえんじ 旧字体で記してある)が目に入る。そこから車道を渡って歩くと正門受付がある。訪問日、新潟県は大雨に見舞われた。私は野外博物館の取材日が大雨だったというのは今回が初めてである。

最初にこの博物館のもとである「伊藤家」の歴史についてホームページを参照して記述する。

宝暦六年(一七五六)、初代文吉は二〇歳で分家した。そして約一三〇〇〇平方メートルの畑が与えられ、結婚した後、農業のかたわら藍商売を始めた。享和元年(一八〇一)、文吉の息子、安次郎が二代目の文吉を継承した。天保八年(一八三七)には名字帯刀を許されて「伊藤文吉」を名乗るようになった。その頃には商売も藍のみならず、雑穀、質屋、倉庫業を営み、屋号「いはの屋」を称し、農業をやめて地行所一の財力のある豪商となった。三代、四代を経て五代目文吉の時、時代は江戸から明治へと移った。明治十五年(一八八九)には、用意してあった土地約一八〇〇〇平方メートルにおいて、新しく伊藤邸の建築工事をはじめ、約八年の歳月をかけて明治二十二年(一八八九)に完成した。六代目文吉の謙次郎は豪商として腕を振るった。明治二十五年(一八九二)の彼の披露宴では、三日三晩盛大に続けられたという。(後述するが、その時の食事の献立が建物内に展示されている。)然し明治三十六年(一九〇三)にわずか三十三歳の若さで急逝した。

時代は明治から大正へ変わる。七代目文吉は慶応大学を卒業後、アメリカのペンシルバニア大学に留学した。第二次世界大戦を経て、それまでの地主としての将来像が描けなくなつたため、七代目文吉は、「博物館を作つて、総ての財産をこれに寄付する」という決断をした。この構想には、進駐軍のライト中尉との運命的な出会いがあった。終戦直後に伊藤家の調査に訪れたライト中尉は、七代目文吉が母校ペンシルバニア大学の先輩であることを知って交流を深めた。ライト中尉は伊藤家を価値のある文化遺産として位置けし、以降、創世

期の北方文化博物館に絶大な支援を与えることとなった。(このことに関しての展示も邸内にある)

また、七代当主との長きにわたる交流によって信頼を深めていた庭匠、田中泰阿弥(たなかたいあみ)によって、五年の歳月をかけて庭を完成させた。この庭に関しても学芸員補の方より、詳しい説明を受けたので、詳しく後述する。

八代目文吉は、昭和二十七年(一九五二)に三一歳で襲名した。そして「心と癒しの場としての博物館」を目指して、野外音楽堂、レストランや宿泊施設なども開き、今の時代に求められるように進化させていった。八代目文吉は平成二十六年(二〇一六)に多くの人に惜しまれつつ他界した。

先ずは門の説明から始まる。外側の門をスタッフたちは「門土蔵」と呼んでいるが、一般には「長屋門」という。建てられたのは明治三二年(一八八九)に建てられた。新潟県内でこのような、土蔵と門が一体になり、白い漆喰が塗られている形式の門は、伊藤家以外では新津の桂家(かつらけ) 現在は郵便局になっており、見ることができない」と、柏崎の飯塚家を抜かすところの伊藤家になる。特に伊藤家は五〇メートルの長さを持つ。これだけの巨大な長さを持つものはそうそうない。こ。当時伊藤家の規模はまだ一〇〇〇町歩ではなく、二〇〇町歩強だった。然し屋敷だけは先輩である滝家とかエチシマ家に匹敵するものであり、自分もいずれば先輩方に肩を並べるぞという意気込みが感じられ、非常に野心的であった。この屋敷は明治一五年(一八八二)年から八年がかりで建てられた。その間にも右肩上がり(成長を続けていった大正から昭和にかけて、二〇〇町歩が五倍以上の一〇〇〇町歩になり、いわゆる千町歩地主)となり、急成長を遂げた。この時に使用人を沢山雇用する必要があった。土地が広がり、組織としても巨大化する必要があり、そのため家も大きくする必要があった。八年がかりで屋敷が作られていた間も、右肩上がりの成長を続けていた。門は二つあり、左側が今、スタッフの方々が使っている「通用門」、右側は冠婚葬祭で使う門である。そしてそこから「内玄関」につながっている。VIPの訪問時にはここから入る。現在でも伊藤家の親族の方は、ここから中に入る。

次に見た土間は幅が狭くなっている。その理由は、元々奥まで続いていたのが、使用人の増加に伴い床面積を広げ、炊事場を一番奥にもっていった痕跡がある。和小屋組みの場所を歩いて少し行くと洋小屋組見になっている。この洋小屋組は明治二〇年以降日本に入ってきた。そのためこの場所は、伊藤家の当主が最後に増築を加えた部分である。先ほど見てきた和小屋組みのエリアが徐々に完成して、この場所へと広がってきた。このように伊藤家は八年がかりで屋敷を建築したが、徐々にその姿を変えている。売り上げが右肩上がりだったことで、人を雇う必要があったためだった。

伊藤家個人の性格としては普請好きであった。斎藤金蔵を棟梁として、その技術に惚れこんだ当主が、さまざまなものを作らせた。因みに、この施設の隣にある前述した光圓寺は伊藤家の菩提寺である。この寺は明治三六年(一九〇三)に伊藤家の出資によって今ある建物に

作り替えた。近代に入って伊藤家が沢山お金を使い、自宅のみならず集落の寺院にも手を加えていった。

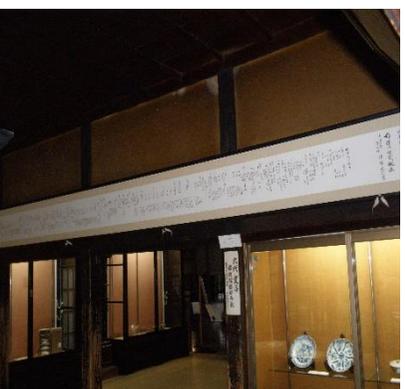


木が生い茂る北方文化博物館の入り口。大きな長屋門。博物館の隣にある「光圓寺」。

風呂場を案内してもらった。浴槽も窯もタイル張りで、このタイルは昭和のものである。移築された個人の古民家では、浴槽といえば大体木製の大きな樽状のものだが、タイル張りの浴槽を見たのはここが初めてである。因みにこの浴室は伊藤家のものではなく、使用人たちが入るものであった。

次は台所の説明を受ける。使用人が六〇人いたが、伊藤家家族も使用人と食事をした。然し伊藤家家族は使用人たちと同じ席になるわけにはいかないので、少し離れた檯の張られた場所で食事をしていた。伊藤家はここから使用人たちに色々命令をしていたので、彼らはゆっくり食事できず、片膝をついて食事をしていた。

近くに和紙に書かれたメニューがある。これは六代目文吉の謙次郎が明治二五年（一八九二年）に結婚した時の「婚礼御祝式献立」である。五月二三日から三日三晩、盛大に行われた。



上が伊藤家の食卓、下が使用人たちの食事場。掲げているのが「婚礼御祝式献立」。小さく見ていくけれど、メニューが細かく記載されている。

献立の途中にハモが出てくる。勿論新潟にハモはないので、京都から取り寄せた。その他伊藤家が結婚披露宴で用いた沢山の皿がガラスケースに入って展示してある。

廊下を歩いての一番の見せ所は丸桁で、長さは三〇メートルである。地主の家はこの桁を一本のスギで表現することが多い。そしてその際のスギの見事さを見て下さいという。一般的にスギは北山杉や吉野杉のように関西から購入するが、伊藤家では隣に阿賀野川が流れている。伊藤家で使用されている材木や岩も、八割九割はここから産出して持ってきている。伊藤家のすごさは、この一本のスギを運ぶことである。ふつうはこの半分の長さで、四列五列のいかに組んで途中でばらしたり組んだりしながら阿賀野川を下ってくる。だが伊藤家では、元々四〇メートルぐらいあったこの杉をどのようにして運んだのだろうかと言われているが、その記録はない。然しさまざまに推察することは可能である。例えば難所を超える際には、ワイヤーをつるして空中吊りをするぐらいのことをしないと運べない。ワイヤーで運んだ事例は新潟県外でもあるということから類推をしていく。おそらくこれを一本運んでくるだけで村中のお祭り騒ぎになっていくことかと思われる。更にこの奥に三〇メートルクラスが二、三本と使われている。これは何を伝えたいかということ、伊藤家を見る際の「木のすごさである。この足元に使われているケヤキにしても、乾燥させるのに一〇年の月がかかる。そういうものをふんだんに使う。そしてケヤキの幅も、伊藤家の家族が使うスペースのケヤキの幅は、地主クラスに限らず、新潟県民一般の家でも同じ幅のケヤキを使っている。それだけ新潟には素晴らしい木が沢山ある。それらを金に糸目をつけずにふんだんに使っている。

座敷に入る。座敷では伊藤家の土地を管理する者たちや客人をもてなす接客の場である。ここには扁額が飾られている。日下部鳴鶴(くさかべめいかく 一八三八〜一九二二)の書による「楽事は尽くさざるを以て趣き有りと為(な)す」と読める。楽しいこと、お金をかけて贅沢をすることは、ほどほどにしないという儉約の精神である。この精神は、伊藤家がその後の農地改革とか隆盛を極めていた時にも、あるいは分家が出た時でも、本家の財産をやせ細らせずに、ずっと右肩上がりを遂げることができた要因といわれる。

次の部屋には、前述した七代伊藤文吉とライト中尉の写真が掲載されている。七代目文吉氏やペンシルバニア大学の写真も展示されており、文吉氏とライト中尉のことを掲載した新聞記事も見ることができる。

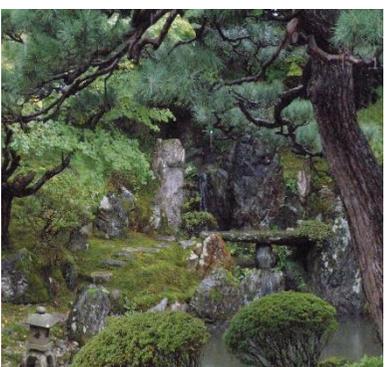
七代目文吉は大きなことを二つした。一つ目は農地改革を乗り越え、伊藤家の構造を残すために博物館化したことである。そのことによって使用人たちを従業員として雇った。そして伊藤家が農地改革以降も屋敷と美術品と従業員を維持管理するためには博物館にするという事であった。博物館化したのは昭和二十一年(一九四六)である。これにより伊藤家は所有権を手放し、財団法人に全部寄付をした。そしてその法人の理事長兼館長として七代目文吉が就任した。これで伊藤家は今まで通りのヒエラルキーの中で今まで通りの生活ができた。これによって地主の生活を現代に伝える博物館になった。

もう一つの功績は庭造りである。我々は主屋から大広間へ移動する。ここは北方文化博物

館が一番見せたいエリアである。なによりも伊藤家が考える文化は庭であると考えられている。その理由は元々池のある庭園ではなく、明治時代までは松林だった。それをもっと立派な庭にしたいと考えていた時に、田中泰阿弥と出会った。田中泰阿弥は柏崎の生まれであり、銀閣寺に出入りしていた。泰阿弥氏は庭のみならず、あらゆる芸事、宗教や歴史などに精通していた人物だった。伊藤家は彼にほれ込み、どうしても彼に自分の庭を作ってもらおうとした。然し戦争によって伊藤家の財産は半減した。然しだからこそ庭を造らなければと改めて思った。今いるこの大広間からの見え方を工夫した。

また伊藤家は欄間を質素にして教養を表現した。中国の古典に出てくる孟宗竹の由来の話や司馬光（北宋の儒学者）の話の家訓としている。更に楠木正成の忠孝の精神と更に「君子中庸（君子は中庸にいと読む）」という書が目に入る。これは儒教の思想である。儒教の中の言葉から、いかにして伊藤家を営んでいくべきかを表している。伊藤家自身、学問を積んで客観的に見ることと、バランス感覚が必要であることをいっている。また中庸は考え方が偏ることを戒めている。これも伊藤家を営んでいくためのキーワードになっている。

少し歩いて床の間の前で、我々は座って庭の説明を受ける。伊藤家は、文化を庭に込めたのは、製作者の田中泰阿弥のすごさによる。田中泰阿弥の庭とは、室町時代の東山文化をベースにしている。この場所に座ったビップが、最高の場所だと思ふ理由が二つある。一つは滝である。京都の天竜寺をモチーフにして石橋がある。この眺めがビップ席からよく見えるのである。自分は京都の一番素晴らしい景色をモチーフにした場所に招かれている。という思いを抱かせ、心が和んでくるのである。ほかにもこの庭にはごっこつした岩肌が多いのである。室町時代の庭には、全集の僧侶の修行する場所である、あるいは生と死、祈りや宗教性や精神性がデザインされている。つまり庭の中に神仏が宿するという表現になっている。前述した理由のもう一つが他よりも著しく大きな岩である。いわゆる礼拝石（らいはいせき）で、ここが一番のビューポイントですという岩である。一直線上の有向こうに岩がゴロゴロした所がある。これは伊藤家にとっての最上浄土を表現している。



「君子は中庸にいる」と書かかれた書。七代目文吉とライト中尉との交流を示す。大雨の日の伊藤家の庭。

もう一つ室町時代の重要な考え方に陰陽道がある。陰と陽のパワーのバランスを持たせて平和が保たれているという考え方である。この考え方は先ほど紹介した「君子は中庸にいる」にも通じるものである。実際に水が流れている「陽」の滝がパワーを放ち、更にそれに対になってそのパワーを吸収する、あえて水を流さない「陰の滝」がある。あらゆるものが陰と陽のパワーが二つ対になる様相を庭の中に入れていく。よく見ると、滝の水の左右に白と黒の縦長の岩がある。この滝に流れている水そのものがご神体になる。左右の岩二つ、あるいは三個で対になり、釈迦三尊や阿弥陀三尊のような表現になる。

水を流さない陰の滝も、水を流さないことで神秘性を保っていると考えられる。こういう事を田中泰阿弥はこの庭の中にうまくとり入れていった。銀閣寺の庭師が力をこめた最高傑作とよばれ、精神性深みを持った庭ということである。伊藤家はこの庭に満足をした一方で金を使いすぎた。終戦後に庭づくりに着手した。当然農地改革でお金がない。そのため家中から反対があった。然し七代目文吉は何としてでもこれを作りきった。その理由は越後一と呼ばれた伊藤家が、倒れるぐらいいまで金を費やしたものにしなければ、新潟の文化財にはならないと言ってこれを完成させた。この博物館で見えるものは美術品や建築のすごさもあるが、この庭園こそ、七代目文吉が「何を残すべきか」ということを一生懸命考えた結論がこれだった。

この庭の工事の時は、七代目文吉も泥だらけになりながら池を掘った。終戦後はどこも経済が回っていないので、伊藤家が経済を回していかなければいけない、公共事業として位置付けた。伊藤家にとつては地域に還元する事例がこの庭づくりだった。村人は男性のみならず女性も土木作業に従事して完成させた。伊藤家にとつては文化を担う事。特に茶室もあるが、京都にもついても通用する茶の湯の文化をキープするだけでなく、発展させるという考えでこの庭を完成させた。

茶室を移動する際に色々見える自然の変化を、存分に一日かけてゆっくり楽しむというコンセプトのもとにこの庭を造ったのである。

こうして、伊藤家の説明は終了した。スタッフにお礼を述べて、外に出た。

北方文化博物館には、伊藤家の母屋、大広間以外に、野外に茅葺き古民家が二棟移築されている。県内の「吉ヶ平（よしがひら）」民家と「刈羽」民家である。「吉ヶ平」民家は、旧南蒲原郡（みなみかんばらぐん）下田村（現三条市）の吉ヶ平集落に、明治初年に建てられた椿和三郎氏の邸宅であった。一九七〇年（昭和四五）の同村廃村の際、八代目文吉が譲り受けて、移築と復元を行った。この民家は「中門造り（ちゅうもんづくり）」という形式である。主屋の一部に中門と呼ばれる突出部を持つ。その場所は主屋への通路や厩が設けられている。屋根の茅には苔が生え、木の壁は時代を感じる。周囲の木々はようやく色付いている。この民家は内部の部屋に上がることはできない。



「吉ヶ平民家」の外観。うまや跡。内部のかまど等の展示品。



隣にある「刈羽」民家である。古民家の側面の壁に、大八車の車輪が沢山並べてある。但しこの家も部屋に上がることはできない。この民家は一九五三年（昭和二八）、七代目文吉によって柏崎市大沢集落から、新発田市の清水園へ移築、復元された。その後、八代目文吉が当地へ移築した。江戸時代初期の中間造り民家である。移築された古民家園ではよく見ることだが、ここでも展示物に紙の名札がついている。



「刈羽」民家外観。畳の上に米俵が積んである。紙の名札のついた展示物。

伊藤家には他にも、八代目文吉が座敷中央に移植した樹齢一五〇年、八〇畳の大藤棚がある。これは当館の代名詞となっている。開花が始まるのは五月初旬である。季節は過ぎてしまったが、

当館のホームページにて見ることができる。藤以外にも春はソメイヨシノと枝垂れ桜が、六月から七月にかけてはピンクの大賀ハスを見ることがができる。また十一月半ばから下旬にかけては絶景の効用が楽しめる。訪問したのがひと月早かった。まだ若干色付き始めたぐら이었다。冬は雪景色と、一年を通じて様々な風景を楽しめる。

また、木の幹の中に仏像が安置されているのが目に入る。「赤松洞 大日如来立像」という。五代目文吉が手植えたとされる樹齢三五〇年の赤松が枯れたとき、松と先祖供養のために八代目文吉が俵の下部をくりぬいて祠として、その松で大日如

来をほって建立した。



シーズンが過ぎた藤棚。さぞかし見事な眺めだろう。松の幹の中に彫ってある大日如来像。



今回は、取材時が大雨という前代未聞の出来事だった。また十月というのもまだ紅葉には早い時期だった。雨の日の庭も、それはそれで味わいがあるが、出来たら紅葉か桜のシーズンに来ることができたらよかった。もし再訪することがあったら、今度は時期を狙って訪れたい。

参考文献 広岡裕著『たても野外博物館探見 明治村から江戸東京たても園まで全国三五館』JTB発行 二〇〇〇年初版。

神田勝郎著 一般財団法人北方文化博物館発行 『北方文化博物館と澤海（ママ）の風景』平成三〇年発行（非売品。）

基本データー。URL <http://hoppou-bunka.com/>

住所 〒九五〇―〇二〇五 新潟県新潟市江南区沢海二十五―二五

電話番号 〇二五―二八五―二〇〇一 FAX 〇二五―二八五―三九二九。

交通機関 万代シティバスセンター発、沢海経由秋葉区役所行き。上沢海博物館下車すぐ。

前述した通り、運行本数が少ないため、新潟交通のホームページまたは問い合わせ電話番号 〇二五―二四六―六三三三で要確認。

高速道路 磐越自動車道新津インターチェンジより約四キロ。約五分。

タクシー JR新津駅より約一〇分、JR新潟駅より約二〇分。

営業時間 年中無休 四月～十一月 午前九時から午後一七時。十二月から三月 午前九時から午後十六時三〇分。

入館料 見学のみ大人個人八〇〇円。団体二〇名以上七〇〇円。見学とみそ蔵利用八〇〇円が五五〇円に。見学のみ小人個人四〇〇円、団体二〇名以上三〇〇円。見学とみそ蔵利用四〇〇円が二〇〇円に。小・中学生は日曜、祝日は入館無料。学生、及び七〇歳以上の方は団体料金に割引。障害者手帳をお持ちの方と付き添いの方は半額。

園内ガイド 午前10時30分と12時。午後は13時30分と15時。

10月から12月までの期間限定で、新潟駅南口から北方文化博物館までの無料シャトルバスが一日四往復する。詳しくは北方文化博物館へ問い合わせください。